

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈日本語解説〉 「海外客家研究から客家文化展示への運用を語る」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009550

〈日本語解説〉「海外客家研究から客家文化展示への運用を語る」

台湾の客家文化発展センターは、客家文化の高揚と保護を主要な目的とする機構であり、北部の苗栗と南部の屏東に大型の施設を有している。施設内には博物館の他、講演会場、イベント会場、図書館（苗栗のみ）などがある。客家文化発展センターは台湾の客家研究を推進するセンターともなっており、これまで台湾各地の大学と提携して客家研究の大型プロジェクトを推進してきた。そして、その研究プロジェクトの成果を展示に反映させてきたのである。本稿は、客家文化発展センターの3名の研究員（頼郁晴・邱秀英・徐国峰）により、そのうち「南側地域」と関連する活動の軌跡を紹介したものである。本稿の概要は次の通りである。

- 客家文化をめぐる世界の展示において、これまで「南側地域」に関するものはほとんどない。台湾客家文化発展センターも台湾の客家に関する展示を主要な対象としている。ただし、このセンターでは企画展において台湾以外の客家について展示することもある。
- 台湾の客家研究は、台湾を主軸とし、中国本土なども対象としてきたが、最近ではそれ以外の地域も着目するようになってきている。本稿の表1で示されているように、2008年～2013年にかけては中央研究院や暨南国際大学に委託して東南アジアの客家の調査プロジェクトを始動させ、2011年～2014年には交通大学に委託して日本の客家、2014年～2017年には台湾—スペイン文化交流協会に委託して北米、2015年～2016年には中華民国海外華人研究学会に委託してラテンアメリカ、2016年～2017年には淡江大学に委託してアフリカの客家についての調査プロジェクトを始動させている。東南アジア、日本についてはすでにその成果が書籍として出版されているが、北米、ラテンアメリカ、アフリカの客家調査については内部報告書が提出されているだけで、正式には公開されていない。
- 具体的に、北米研究プロジェクトはアメリカとカナダ、ラテンアメリカ研究プロジェクトはブラジル、アルゼンチン、パラグアイなどを対象としている。アメリカ大陸には戦後に台湾から移住した客家が少なくなく、これらの調査では台湾客家移民を中心とし、それ以前の旧移民についても調べている。他方で、アフリカ調査プロジェクトは、客家が多いモーリシャス、レユニオン、南アフリカを対象としている。ここでも台湾系の客家移民が調査に切り口となっている（その意味で、本書収録の夏論文や林・李報告とは視点が異なっている）。
- 2012年に客家文化発展センター内の博物館「台湾客家文化館」が開設されて以来、以上の調査プロジェクトを基盤とした展示活動をおこなってきた。現時点ではその対象は主に東南アジアにあり、マレーシア、シンガポール、タイ、インドネシアの客家をめぐる企画展をおこなってきた。それに対して、東南アジアの外の客家については、

まだ展示をおこなっていない（しかし次の原稿で詳しく述べられているように、日本の客家についての企画展の構想が現在進められている）。「南側諸国」の客家をめぐる研究を基盤として、それを展示にうつすことは今後の課題となっている。

本稿からは、台湾客家文化発展センターの活動の一端を知ることができるが、そのなかでグローバルな規模の客家研究に力を入れ始め、すでに関連の調査をおこなっていることが具体的に示されている。客家文化発展センターが大学・研究機構との協力のもとで推進してきた「南側地域」の客家研究は、本書であまり触れられていなかった、戦後の台湾客家のグローバルネットワークが示されている。残念ながら、その調査成果はまだ公開されていないが、それらが公開されるようになれば、本書のデータの補完にもつながり、「南側地域」の客家が一層進展する契機となるに違いない。さらに「南側諸国」の客家をめぐる展示が実現したならば、「北側地域」ばかりがとりあげられてきた現在の客家文化展示を変革する、重要な契機にもなるであろう。「南側地域」において客家と広府人が歴史的に二大勢力を占めてきたことを考えれば、こうした展示は華僑華人展示そのものにおいても大きな進展となりうる。

(河合洋尚)